2022 年度賛助会へのお誘い

特定非営利活動法人 SAJA(NPO 法人サヤ)の目的にご賛同いただける方は、是非賛助会にご入会ください。
当法人の目的は、在宅の精神障害者に対して、地域生活支援に関する事業を行い、併せて障害者の自立と社会経済活動への参加を図ることを通して、精神保健福祉の増進に寄与することです。

主な事業は①就労継続支援Ｂ型事業所の運営　②精神保健福祉に関する知識の普及啓発活動
③障害者福祉関係団体との交流及び地域福祉組織化活動　④研修事業等

賛助会年会費は 2,000 円です。ご入会いただいた方にはたんぽぽの機関紙「LIFE」（年２回）をお届けします。何卒ご支援、ご協力をよろしくお願い致します。

会費のお支払方法…①郵便振込(申し訳ありませんが、振込手数料のご負担をお願いします。)
口座番号：01680-5-57087　加入者名：特定非営利活動法人サヤ
②当事業所窓口にて支払い

図書の紹介

『ネガティヴ・ケイパビリティ　答えの出ない事態に耐える力』
著 者　帚木 蓬生　(Hahakigi　Hosei)
出 版　朝日新聞出版
定 価　1,300 円(本体)+税

ネガティヴ・ケイパビリティとは、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える力」または「性急に証明や理由を求めずに、不確実さや不思議さ、懐疑の中にいることができる能力」を意味します。社会福祉や対人支援の分野に当てはめて考えてみると、本来はすべてわかっていて、正しい解決策や解決方法が予め用意されていることで、それを基に問題解決に向けて支援していきたいところですが、実は人の身の上に起こることの多くは極めて個別的であり、ケースバイケースであることが殆どです。すぐには解決できず、葛藤や戸惑い、不安を伴うものばかりです。そんな時にそのような事態にある本人とその本人にかかわる支援者が、目の前の課題をどの程度「宙ぶらり」な状態で受け止めることができるのか、不確実な状態のままでどの程度耐えうることができるのか等、近年、対人援助の領域においてはこれらネガティヴ・ケイパビリティの重要性が注目されています。

編集後記

今回の演劇にたんぽぽとして関わらせていただき、全く知らない世界に足を踏み入れるという経験を久しぶりにしました。とても勇気とエネルギーの要る状況でしたが、四国学院大学の皆さんにたくさんサポートをして頂き、公演までたどり着くことができました。何かに新しく挑戦することへの不安や緊張を実感として得ました。それだけではなく、プロフェッショナルな人たちと共に活動することの楽しさを知ったような気がします。そして何より、たんぽぽに俳優魂・女優魂を持った方々がいらしたことが私としては世紀の大発見でした！楽しくもあり、苦しくもあり、やりきった実感は強くありますが、とにかく特別な数日間をすごせたなあ、と

LIFE

第７１号　２０２２年８月１日発行
特定非営利活動法人ＳＡＪＡ（サヤ）
就労継続支援Ｂ型事業所　たんぽぽ
〒763 - 0066　丸亀市天満町１ - ２ - 31
TEL：0877 - 22 - 2840
HP　tanpopo-saja.com

「誰もが主役の地域社会を目指し明日に向かって！！」

理事長　村井誓子

日頃は当就労継続支援Ｂ型事業所たんぽぽの諸活動に対しまして格別のご理解とご協力を賜り厚く御礼申し上げます。さて、この度５月の理事会において代表理事を交代することになりました。数年前から相談や検討がなされていましたが、私自身、重責を担うことへの決心がつかなかったことと、他の理事からの時期尚早という意見もあり、これまで先延ばしとなっていました。今後、前理事長の西谷氏は副理事長兼相談役ということで、様々な活動において引き続きかかわりをもち、これまで通り私達が福祉の原点を見失わないよう助言いただけることをお願いしています。

誰が理事長になってもＮＰＯ法人 SAJA（サヤ）が大切にしている理念を念頭に置いて引き続き活動を続けていくことに変わりはありません。過去には引き継ぐ者がおらず、また経営が厳しい状況になり存続の危機に見舞われました。その度に前理事長や、理事、スタッフ、メンバー、家族、協力者の方々と状況を共有し、必死に何とか存続してきた経緯を体験しています。引き続き大切にすることを変えずに継続していくことは、現制度のもとでは容易なことではありません。しかし、これまで事業所を残そうとした沢山の方々の想いを知っているからこそ、諦めずに努力する所存です。私が事業所にかかわる、さらにその 10 年も前（1990 年）に家族の方々や近隣の関係者が「たんぽぽ共同作業所」を立ち上げました。そして存続できるよう奔走し様々な形で協力した方々がいるからこそ現在の「たんぽぽ」という場所があります。

私自身はこの約 20 年間、働きやすい環境で仕事をさせていただいたことに感謝をしています。働きやすかったのは、福祉理念や大切にすることが同じ尊敬できる人達と一緒に、話し合いながら活動を続けてきたからです。現場では試行錯誤をしながら自分自身を振り返ることの繰り返しでした。そしてこれからもそのことは変わりません。

「ともに働き、ともに過ごす日常の中で、その人がその人の人生の主人公であることを再認識できるような実践をつづけていく。私達事業所はごく当たり前の生活者として地域で暮らす際の資源の一つに過ぎない。」（『前理事長のひとりごと』より抜粋）「誰もが主役の地域社会を目指して」というスローガンのもと、これからも様々なことに挑戦していきます。今後とも皆々様の変わらぬご支援とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

君はダンデライオンズを観たか！？

副理事長　西谷清美

６月 17 日(金)と 18 日(土)の両日、四国学院大学ノトススタジオにて演劇「ダンデライオンズ」が上演されました。コロナ感染防止対策を講じながらも、２日間で約 150 名の観客数を集めることができました。多くの関係者の皆様にご来場いただきましたこと、厚くお礼申し上げます。

さて、「ダンデライオンズ」と命名されましたこの度の演劇ですが、その名のとおり「たんぽぽ達」ということで、「たんぽぽ」と四国学院大学のコラボ企画として上演されました。

脚本と演出は、四国学院大学社会学部演劇コースの仙石桂子先生が「たんぽぽ」の３人のメンバーへのインタビューを基に３つの物語をそれぞれ異なるタッチで描いています。

1 作目の町村修の物語は、精神病体験と若き日の思い出のエピソードを主人公である修自身が回想しながら演じ、その波乱に満ちたストーリーが展開するという内容です。そして２作目の柿沼正志の物語は、厳格な父親と支配的な家庭で育った正志が、次第に幻覚妄想に苛まれていき、父親への暴力を機に精神科への強制入院の体験と、退院後の「たんぽぽ」との出会いを描いた内容です。さらに３作目の後藤桐子の物語は、様々な人間関係(友人、恋愛、婚姻等)のどこにも安住できない桐子が、幻覚妄想、自殺念慮等の精神症状に苦しみながらも、自分自身を、そして自分らしさを探し追い求めるという、物語の最後に出演者全員で歌った、まさに”This is me!!”の歌そのものの内容です。

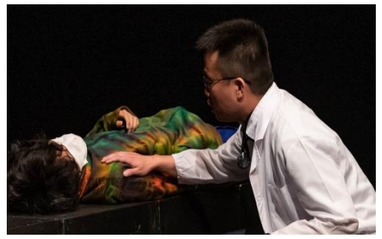
「ダンデライオンズ」は、治療や支援を生業とする精神医療の専門家や福祉の支援者による症例とか事例の物語ではありません。あくまでも精神障害当事者の側に立ち、その言葉をどこまでも真摯に受け取り、その体験と物語を傾聴、共感、想像することではじめて形にすることが許される「人間」の物語です。換言すれば、「ダンデライオンズ」はその企画から制作、稽古、上演のすべての段階において、精神障害当事者が本来の自分と人生の主役を取り戻す取り組みであったと言えます。

最後になりましたが、四国学院大学の仙石桂子先生には心よりお礼申し上げます。また、演劇コースの学生の皆さんには、多くを教わり、沢山の支えと勇気をいただきました。

そして、四国学院大学パフォーミングアーツ研究所(SIPA)のスタッフの皆さんには縁の下から凄い力で支えていただきました。学生の皆さん、SIPA の皆さん、本当にありがとうございました。たんぽぽの４人のメンバーの皆さん、本当にお疲れさまでした。土日もなく、また夜遅くまでの稽古、大変だったと思います。皆さんの役者魂、見せていただきました。役者として出演したスタッフ、職場を支えてくれたスタッフ、皆さん、本当にお疲れさまでした。

演劇作品としての完成度は、私たちには評価できませんが、誰かの物語が実は私の物語にもつながっているんだということを学んだ大切な経験となりました。

ご来場いただきました関係者の皆様に深くお礼申し上げます。今後とも、NPO 法人サヤたんぽぽの諸活動へのご理解、ご協力、宜しくお願いいたします。



四国学院大学 HP（SIPA）より抜粋

Gallery

当事者研究

副理事長　西谷清美

７月 16 日(土)の 10:00 より、メンバー4 名、OB1 名、スタッフ２名、外部からの参加者１名の計８名で当事者研究を行ないました。今回が初めてという人が２人いましたので、まずは２人１組で「弱さの情報公開」からスタート。その結果、今回はユニークな苦労 name が多々提示され、参加者の研究意欲は掻き立てられました。本来でしたら、その一つひとつを具に紹介したいのですが、今回が初めてという外部から参加された方の「香川生活淋しい病」を研究してみたいという、ベテラン当事者研究者達の「おもてなしの心」というか「やさしさ故」というか、なんとなく今回は「香川生活淋しい病」の発症経緯から回復過程、予後の注意点を含めて、研究することに決定しました。

まずは、15 年に亘る東京での一人暮らしを経て、結婚を機に見知らぬ香川の地にやって来た H さんの香川での淋しい日々を大公開。家庭生活は充実しているものの、一歩家を出ると東京で維持していたような人とのつながりもなく、淋しいと感じる日々を切々と語っていただきました。

そんな H さんに対して、香川生活が少しでも楽しめるようにと、周りのメンバーからはアイデアと叱咤の応酬、そしてお節介と激励が飛び交い、最後には「5 年後には香川生活バリバリよ!!」との声も聞かれるなど、研究が進むにつれてなんだか周りのメンバーが自信たっぷりとなりました。人を励ましたり、支えたりすると力が湧いてくるようです。場の力って凄いです。

そんな楽しい時間がゆるゆると経過し、今回の当事者研究も平和のうちに無事終えることができました。笑